

お金の神様。

朝森 顕

凍えるようなある寒い夜、お金の神様と話をしていた。

「神様。どうすればお金がいただけますか？」

するとお金の神様はクスリと笑ったが何も答えてはくれなかった。僕は祈りがもう一度ある純度を保つまで瞑想を続け、心の内側が柔らかな微温い海のような静けさを保つまで待って、それからもう一度問いかけを始めた。

「神様。どうすれば、あなたは僕のもとに来てくれますか？」

神様はもう一度笑い、少女のように微笑んでみせた。僕にも少しずつ神様が見えてきた。

神様は、薄紫色の髪の毛を持った女性で、紙幣でできた翼を持っている。瞳は海よりも青い蒼で、そのまま光り輝いている。肌は透けるように白く、そのために輪郭は光に溶けてしまっている。

お金の神様は、赤い温かな光を放つ女神様だった。

「女神様、どうかお答え下さい。僕はどうしたら、あなたと一緒にいられますか？」

女神様は、おかしくてしょうのないというように口元を抑え、肩を揺すってさらに笑い、少しだけ真面目な顔をすると、

「あなたは私のことが嫌いではなかったの？」

と、僕の目を見て訊ねた。

あまりにも美しい瞳に見られたので、反射的に嘘をつきそうになったが、女神様の瞳の優しさに喉元から出かかった嘘をすんでの所で僕は堪えた。

「申し上げます。私は女神様を愛しています。」

女神様はさらに大きな声を出して笑った。もうこらえ切れないというような笑い方だった。

「そう？そうだったの？知らなかったわ。ときどきあなたのことを訪ねてはみたけれど、いつだって、これまで、今日のように私を呼んだことなど一度もなかったじゃない。愛の神様、恋の神様、夢の神様、真実の神様、幸運の神様、水の神様、火の神様、最後には死神様にまで拝み倒すようなあなたでさえ、私を呼んだことなんて一度もなくて、私の子供たちがいなくなったら、恨み言でも呟くように、くそっ金がなくなりやがったって、まるで私が疫病神か奴隷みたいな言い方でなじられてしまったわ。私、あなたには愛されていないものと今日まで思ってきたのだけれど？」

「まさか！そのようなことはございません。」

「本当に？」

「本当でございます。」

「じゃあ、私を愛してくれますか？」

「もちろん。この身が果てても愛し続けます。」

女神様は、それを聞いた瞬間、ふっと冷たい視線をこちらに向けて、僕が目を合わせると次の瞬間、あたりに響き渡るほどの大爆笑を始めた。僕もいろんな愉快的な人種は知っているがこんなに笑う人を見たことないと思えるくらいお金の女神様はけたたましく笑った。

「そうですか。わかりました。では、あなたにアドバイスと幸運を授けましょう。こんなに笑わせてくれたのはあなたが初めてです。私をどれくらい愛してくださるのか、あなたの滑稽ぶりがどこまで深まっていくのか、拝見させていただきましょう。では、言いますよ？心して聞きなさい。」

「はい。女神様。」

「返事が素直で大変よろしい。では言います。好きなものを減らしなさい。」

「はい？」

「あなたが好きになったものを減らしなさい。そうすれば、あなたにはまた好きなものが現れます。それがあなたに新しい道を拓いてくれるでしょう。」

「好きなものを減らす、ですね。了解しました。なんとか頑張ってみます。ありがとうございます、女神様。」

「大変よろしい。次に、たくさん笑いなさい。それがあなたをより魅力的にしてお金の匂いをプンプンさせるでしょう。微笑はどんな神様も好む香水のようなものです。どんなときもまず微笑みなさい。いいですか？分かったわね？」

「はい。女神様。今日からたくさん笑います。ありがとうございます。」

「大変よろしい。あなたはいつも返事だけは素晴らしいわ。」

「ありがとうございます。」

「よろしい。では、最後に夕日を見なさい。そのときに感じることを大切にしなさい。夕焼けにははずかですが、金運を与える不思議な力があります。夕焼けをみつめて、沈みゆく大きな光を見なさい。それがお金の本質です。いいですか？夕日をたくさん見なさい。そこで感じることを大切にしなさい。わかりましたか？」

「はい。わかりました。女神様。他に僕ができることは何かないでしょうか？」

「私を愛しなさい。」

「それはもうもちろん。もうすでに愛しております。」

「よろしい。その愛を口先だけではなく貫き通しなさい。お金を遣うときには、どんなにささやかな金額の時も、私が傍にいることを思い出して。お金はとても正直で働き者です。正直で働き者の人の傍を好みます。私もそんな男性が好みです。いいですね？私に対し、誠実で、愛情深く、そして私をいっぱいを感じなさい。それが私がもたらす幸運そのものになります。お金はいつもあなたを守っています。いいですね？」

「わかりました。女神様。本当にありがとうございました。明日から言いつけを実行します。」

「今から実行しなさい。」

「わかりました。ありがとうございます。」

「たいへんよろしい。愛していますよ。」

「僕もとんでもなく愛しています。」

そうして、凍えるような冬の夜は終わり、朝はやってきた。

女神様はあくびをしながら朝陽の中へ消えた。ちょっとだけふらふらしていた。

「ありがとうございます。女神様。」

僕は女神様の背中に深々と頭を下げ、拝み倒し見送った。

女神様のけたたましい笑い声だけが耳元に残っていた。

愛して、笑わせて欲しいだなんて、そして夕日を見て自分を思い出せなんて、なんて、お金って女性的なんだろうと眠たげな頭を抱えながら思った。

end.